

# 2人の続き②

takashiishimoto

ゴールデンウィークが明けると、時々サークルの溜まり場があるラウンジへ顔を出すようになった。校舎へのエントランスも兼ねるその1階のスペースは他のサークルも15団体ほど集まっています、煙草が煙る中だれた学生達がいつもたむろしていた。僕はそこへ行くとまず備え付けの自販機で紙コップのジュースを買い、誰かがどこからか持ってきてそこに置いた背もたれのないソファに座る。麻雀はやらないので、あとはたいてい先輩のやるカード麻雀を見ているか、誰かが置いていったマンガ雑誌か、写真ファイルを見ているか、昔やった舞台の台本を眺めているか、煙草を吸っていた。まわりの先輩達から聞かれたことに素直に答えて、愛想を言って、同期のやつが来ると授業の情報を交換した。たまに先輩のうちの誰かが音頭を取ってそこから飲みに行くこともあった。

そんな風に過ごしていた6月のある土曜日、ラウンジに残っていた4人のメンバーで、また駅前まで飲みに出ることになった。その4人の中には内山さんもいて、彼女と少人数で飲みに行くのはそれが初めてだった。煙草を吸いながら、カード麻雀をしているか、マンガを読んでいる内山さんは、話しかけられると、笑いながら答えているのだけれど、その笑みをたたえた眼差しにどんな感情を含んでいるのかなんとなく掴みどころがなく、少し人に距離をおかせるようなところがあった。内山さん以外にその日ラウンジに残っていたのは、幹事長の大森さんと、佐野さんという2年の女の先輩だった。

6月の爽やかな風が吹き抜ける大通りを4人で歩きながら駅前へ向かう。高校1年の夏休みにテニス部を辞めて以来、僕はクラスメイトとゲームセンターに行ったり、図書館の近くの喫茶店でアルバイトをしたり、女の子と付き合ったりしてブラブラと過ごしてきた。下校する時は、吹奏楽部が管楽器を鳴らす中、サッカー部や野球部、ラグビー部が練習をしている横を自転車に乗って、ある時は学校の仲間と、ある時は1人で下校した。3人のちょっと後ろにくっついて居酒屋に向けて歩いている気持ちのよい夕暮れ時は、その時僕が感じた少しもの寂しい気持ちを思い出させた。

幹事長の3年の大森さんは、ラウンジにいたことが部員の中で一番多いという理由から幹事長に選ばれた。遊びの計画を練り、自宅の4駆を使ってテニス合宿や舞台の打上げ旅行に先頭を切って繰り出す。裏方をやってくれる女の子がいなくならないのは大森さんの力によるところが大きいと思われる。大森さんは舞台がある時は役者をやる。佐野さんという僕と同じ文学部の2年の先輩はそういう裏方の女の子の1人と言えるかもしれない。ただ僕の知らない作家や詩人の名前をたくさん知っている。たまにラウンジを覗いて、自分のやるべき仕事もう動きはじめているかどうかを確認しに来る。

駅前の、サークルのコンパでよく使う居酒屋へたどりつくると僕達はテーブル席についた。僕の正面が大森さんで、隣が佐野さん、内山さんは斜向かいに座った。

「どう石本君、雰囲気慣れてきた？」

大森さんは、新入生がラウンジに顔を見せるといつもしている質問を僕にした。大森さんは、染めているのではない、単にドライヤー焼けした髪を真ん中から分けていて、紺のプリントティシャツを着ている。

「はい、暇な時よく来るんでだいぶ内山さんの台本読みましたよ。」僕が内山さんに話けると

、

「暇つぶしの学生演劇。」と、内山さんは煙草をくわえてニヤニヤ笑いながら、僕への皮肉とも冗談ともつかないことを言った。

「それで内山さんのファンになりました。」

僕もちょっとおどけながら本気とも愛想ともつかない風に答えた。

「内山さんはいつからモノを書いてるんですか？」

僕がそう聞いたところで、ビールではない発泡麦酒が2リットル瓶で運ばれてきたので、僕がその大瓶を持って、大森さん、内山さん、佐野さんの順に注いだ。大森さんが僕に注いでくれるコップを両手で持ちながら内山さんの横顔を覗いて、

「内山さんは大学に入る前からこの＜シャイアン＞って発泡酒知ってましたか？」

と聞いた後で、大森さんに「すみません。」と発泡酒を注いでくれたお礼を言った。大森さんが、僕の言葉を受けて、

「2本目からは普通のビールにしような。はい、じゃ石本君お疲れ様。」と僕への労いの言葉を乾杯の音頭に代えて、みんなで飲み始めた。僕は、下を向いて笑いながら、もう一度大森さんに「すみません。」と言った。あまり飲めないのも他の3人ほどは、ビールだろうが、発泡酒だろうがこだわりはないが、ただサークルのみんなが言うように、＜シャイアン＞は僕もまずいと思う。大森さんには、その時点でもう2回くらい飲み連れていってもらったことがあった。ラウンジにいる何人かを駅前に連れだし、大森さんはまず、僕か、僕以外の新入生にサークルに慣れたかどうか聞くか、そうでなければ下級生に調子はどうか、最近どうしてるかを簡単に聞く。大森さんが座談をひとしきり仕切るその間、僕は内山さんがグラスを見ている。まとめ慣れたホームパーティのホストのように、首を左右に振ってみんなが喋れるようにしていきながらも、話題の選び方は自然でたわいのないものだし、仕草もこなれたものだった。ビールが進むと、この前やった舞台の苦労話や馬鹿話を新入生や下級生を相手にして話し、乗ってくると、

「よし、じゃこれからレストランでの正しいクレームの入れ方を研究しよう。まず僕から。『もし、あなたが内気な人だったら。』』と言って、ごちゃごちゃ演じはじめる。芸のたつ役者の先輩が他にもその場にいれば大森さんの後が続くし、いなければ酔っ払いながらまた話題を他の人に振って、軽く女の子をからかってみたりする。いつもかなり酔うが、つぶれない。口数が少なかった新入生もだんだん話すようになるか、少なくとも笑っている。僕もそんな様子を煙草を吸いながら笑って見ている。自分からはあまり飲まないし、誰も強要しないのでたいてい素面だ。

「さっき石本君、ウッチに何か言いかけてなかったっけ？」大森さんがコップを置いて、チョリソーをつまみながら言った。

「内山さんはいつからモノを書いてるのかなと思って。」僕はそれまで、内山さんとそんなに話したことはなかったが、彼女から、「なんで？」と聞き返されることを予想したので、それよりも早く、

「いや、あの内山さんがいつから役者やってるのは確か聞いたことがあるんですけど、内山さんのことや佐野さんのこととかも聞いてみたかったし。」と言ったあとに大森さんの顔を見た。

「ウッチは最初からだよな、入ってから。」大森さんが代わりに答えて、内山さんの方に首を向けた。

「私書きたいんですけどいいですか、って言って入ってきたんだもの。」内山さんの手元に置かれた灰皿から煙草の煙が上がっている。内山さんの箸は揚げ出し豆腐を半分に千切っている。

「それで、最初からずっと書いてるよな。」と大森さんが言うと、

内山さんは、「だって、『ちょうどよかった。書いてる奴が行き詰まって、次はありものにしてよ、って話してたぐらいだから。』』って言われて、私が書いたやつが採用されちゃったんだから。」と答えた。

「それが劇を書いた最初ですか？」と僕は聞いてみた。

「高校の時に文芸部みたいのに入ってたのよ。部の名前は新聞部っていったけど。」

「どんなの書いてたんですか？」と矢継ぎ早に質問したところで、大森さんに、

「石本君てそんなに質問魔だっけ？」とまぜっかえされた。大森さんは佐野さんに〈シャイアン〉を注いであげながら、

「ウッチ、またファンが出来てよかったな。」と言った。内山さんと同じで、僕にとって、少人数できちんと話すのは初めての佐野さんも、

「私も内山さんの結構なファンですよ。」と言った。佐野さんは黒のパンツスーツに光沢のある深緑のシャツの襟を外に出して、4人の中で一番洒落た格好をしている。内山さんはベージュのコットンスカートによれた紺のジャケットを羽織り、僕は茶色地のチェックのシャツの裾をズボンの外に出していた。

ショートヘア、少しだけ細すぎるかもしれない切れ長の目と、きれいな鼻筋を持って、クールに見える佐野さんが、笑いながら、

「大森さんも、舞台以外の演技が特に好きです。」と喋ると、一座に親密な空気が流れるような気がした。

大森さんは、「君の役者デビューも近いよ。」と佐野さんに言った。

僕が火がついていた煙草を消して、ブロッコリーにマヨネーズを付けて頬張ろうとした時内山さんが口を開いた。

「最初のうちは自殺したり、殺したり、割と人が死ぬ脚本書いてたのよ。それが劇になるあてはなかったんだけど、新聞部の雑誌を読んだ、クラスが一緒だった男の子が『やろう。』って言ってくれて。それで、2年生の時にメンバーを募ってみたら結構やりたいって人がいて。最初から舞台の脚本を書いていた。だってセリフだけ考えればとりあえず話が進んでいくじゃない。」

「高校に入って最初に書いた話はね、ある女子高生のお母さんが自殺した後、内々に行ったその十三回忌という設定でね、舞台の上には大きい座卓が置かれて、その上に寿司桶や天麩羅の盛り合わせやビールが用意されているの。話の導入の部分は集まった、身内や、ごく少数の友人達が交わす時候の挨拶や近況報告で、その場には当時は女子高生だった女の子が今は主婦となってそこにいて、それで、彼らの現在の状況についての会話を踏まえる形で、みんなが当時を回想することになるの。その亡くなったお母さんは軽鬱病の既往歴はあったけど、当時は時折頭痛や倦怠感を訴えたりすることはあっても、ご近所とも割と楽しそうに付き合っているように見えたし、完全とは言えないにしても夫婦仲は悪い訳じゃなかったし、その女子高生は割と賢く育てていて、お母さんの性格には少し複雑なところがあったけども親子関係も悪くはなかった。舞台に人の出入りがあって、その場に自殺した女の娘夫婦が二人だけになった時、妻は夫に、『お母さんが自殺したのは私のせいでもあるのよ。』と言うの。この話題は二人の間ではたまに出る内容で、妻の出だしはいつも一緒に、夫の答え方や態度がその時々で違うの。「そうかもしれないけどしょうがない。」と答えたり、「人から伝えられるどんな言葉も、どんなそぶりでも、君には刺激が強すぎる時があるんだね。」と言うときもある。「家に帰ってくると、台所に電気がついて、テーブルの上にはコップとカプセルを出した後の銀の台紙のパッケージがあって、床にお母さんが泡を噴いて腫れ上がった紫の顔をして転がっていた。」こともそれまでに夫は何回か聞いていて、その話を聞いた後に、将来出来るかもしれない二人の子供の話は彼はするのよ。『もしお前が気を病んで死んだら、その子も君と同じことを言って自分を責めるんだろう。それでどんな回答も拒否してしまうんだろうね。』って言うのよ。」

内山さんは揚げ出し豆腐や、鶏の唐揚げや、ホワイトアスパラを食べ、発泡麦酒を飲みながら話

した。内山さんが話し出すと大森さんも冷やかさずに、飲んだり、煙草を吸ったりしながら静かに聞いていた。相槌を打ったり、先を促す役割は主に僕が担当した。

久しぶりに言葉を交わす人々のぎこちない会話。時候や健康についての挨拶、世の中のニュースや近況報告、最近の身近の問題と過去の問題についての考察、近くの中学校のグラウンドから聞こえてくる人々の声、様々な音、6月の生暖かい緩やかな風、今彼らが毎日感じている気持ち。食事や法事のちょっとした手伝う場面。親戚関係と友人関係、親子関係、それに夫婦の関係。生と死。明日ということ。墓園のはなれの建物から見える、日が射し込む予感がする、くすんだ色彩の中の芝生の緑。彼らの抱える現在進行形の事件。自殺する判断についてそれぞれの考察。内山さんの話は、主として登場人物たちのセリフの切れ端で語られていった。

「それで、テーブルの上を片付けている時に、自殺した女性の実のお母さんが、自分の孫である自殺した女性の娘に向かって、何気なく『お坊さんっていうのも真剣にやったらもたない仕事だね。』って言うと、孫娘は、『いい加減にやるか、本当に真剣にやるかよね。』って答えるの。ちょっと経ってから彼女は『おばあちゃん、私は真剣になれなかったら悲しい。だからなかなかもたないの。』って言うのよ。それで、おばあちゃんは片付け終わった後に、『疲れてたらお休みなさい。』って言うの。そこに孫娘の夫がひょっと寿司桶を取りに部屋に入って来るの。雰囲気を感じた夫は妻の、時に見せる深刻癖は知ってるので、わざとおどけた調子で、『いいんだよ。おばあさまがそう言ってくださってんだから。』って言うの。」

「それで、実は、その後のある場面でこの夫と夫の妹との会話で、自分の妻にも、特にこの時期は軽鬱病の傾向が見られることを告白することになるの。」

またひとしきり内山さんが話した後で、僕は、「その台本はまだ家にあるんですね。」

と聞いた。飲んでる時に話して貰うのではなくて、一人できちんと台本を読んでみたかった。内山さんが、うーんと考えて止まってしまったので、

「大森さんはこの話知ってましたか？」と今度は大森さんに聞いてみると、大森さんも初めて聞いた話らしくて、大森さんは「評判はどうだったの？」と内山さんに聞いた。

「まずね、今とあまり変わらないんだけど見てくれた人の絶対数が少なかったのよね。1日2回、2日間で4回やったんだけど、出演者の家族とか友達とかがほとんどというか、自分達の関係者が観客の全てで、1回につき10人は見てなかった気がする。けどおもしろかったよ、やる方は。」

「その話、おもしろそうですね。」と僕が言うと、

「実際やってみて、笑えるようなところとか、ほっとできるところとか結構ある？」と大森さんが聞いた。

「ハッピーエンドよ、いつものごとく。だって少なくとも主人公夫婦2人は一緒に家路に着くんですもん。」

「それ、いつかうちでやってもよくないかな。」とまた大森さんが聞くと、内山さんは、煙草を人差し指と中指の間に挟んで、煙を吐き出しながらニッコリして、「ネタがなくなって、書き直す気になったら。」と言った。

発泡麦酒が切れたところで、大森さんは、

「石本のリクエストかなえるよ。サッポロのラガー2本下さい。それから野菜スティックも。」と店のお兄さんに注文した。それから、静かだった佐野さんに、「佐野さん、聞いてた？どうだった？」と聞いた。

佐野さんは、「大森さんが静かに話を聞いているのって珍しいですよ、内山さん。」と内山さんに話しかけた。

その夜、大森さんはいつものごとく大いに飲んだが、ろれつは怪しいもののやはりつぶれなかった。内山さんと、佐野さんはマイペースでビールとサワーを飲んで楽しそうにしていた。僕は途中から、ウーロン茶と水を飲んでいて、内山さんが昔書いた劇の話がひとしきりつくと、「ウッチだったらあのドラマこれからどうする？」と大森さんが聞いたのをきっかけに、テレビでやってるドラマのストーリーをいじるゲームをした。フジテレビの恋愛ドラマは、主演のカップルが子沢山となったため大家族モノになり、日本テレビの女探偵はその後、予備校の事務職員、介護用ベッド他老人用の介護器具のセールスレディ、ホテルのクリーニングスタッフ、ステーキハウスでの鉄板焼係、ルポライターなどに扮して調査活動をするにすることで、それぞれの時の事件と犯人がどうだったらおもしろいかをみんなで考えた。その後は、大森さんが生まれて初めて役を演じた時の話、（高校1年の3月にやったサッカー部の3年生を送る会での、赤んぼを背負っている「子守りドリブラー」という役を演じた時の、出演約1分、受けは今ひとつだったという話）で、内山さんと僕は聞いたことがあるが、佐野さんは初めて聞く話だった。）佐野さんのアルバイト先である中学生のための進学塾の話（どんどん愚痴になった。）、内山さんの考えている次の劇の内容と（「新聞記者の話でジャーナリズムについて考えたいのよ、大袈裟に言えば。」と彼女は言っていた。）話題は転々と移りながら時間も9時を回った。大森さんがトイレに立った後、内山さんと佐野さんは最近文庫化されたマンガについて話していて、僕はそれを聞きながら、そんなに面白いなら僕も読んでみようと思った。タイトルの聞き覚えはあって、雑誌の紹介記事かなにかで話のつかかりも知っていたし、芸能人が誰かが好きなマンガに選んでいた記憶がある。大森さんは顔を洗ってきたらしく鼻の頭を赤くしながら戻ってきて、「そろそろ行こうか。」と皆に声をかけた時、女性2人の話題に気付いて、「あ、『アッシュ』全巻揃ったんだ、俺も買わなきゃ。」と言っていったん席に着いた。僕が、「それ、そんなにおもしろいんですか？」と聞いてみると、大森さんは、「1週間で全巻読むのは作者に失礼かもしれない。」と答え、内山さんは、「一週間はそればっかになるよ。小学生の時に読んだ『オズ』シリーズみたいに。」と言った。内山さん以外の2人は連載当時から読んでいたのではないらしく、作品のおもしろさを最近発見した興奮がまだ冷めていないようだった。

「魅力的で細かいところまで描き込まれたキャラクター、ページをめくらせていくアイデアのあるストーリー展開、作品の今日性、みたいなものですか。」と僕が聞くと、内山さんは、「もちろん全部あるし、」と言ったところで煙草の煙を吸い込んで、

「吉田秋生の他の『夢みる頃をすぎても』『河よりも長くゆるやかに』とかもおもしろいんだよ。」と言いながら煙を吐いた。それから吸殻でいっぱいになった銀の円盤型の灰皿に煙草を押しつけて立ち上がり、それがみんなが帰る合図となった。

大森さんと佐野さんは地下鉄に乗るために階段を降りていき、僕は渋谷まで、内山さんは池袋まで山手線に乗っていくためにホームへ階段を上っていった。

「あー、夜は涼しいわ。」僕の数倍はお酒が飲める内山さんは夜風にあたってそう言った。僕は、「試験が始まって、それが終わったら夏ですね。」と言った。土曜の夜の駅のホームはウィークデイに比べて学生もサラリーマンも少ないため、まだ10時前だが閑散としていた。ここのところ暑かったためTシャツか半袖のシャツ一枚という格好の人がほとんどで彼らも涼しそうにしており、いつも見られる質の悪い酔っ払いの姿は今はなかった。3分間隔で到着する山手線がくる間、内山さんは気持ちよさそうにポツと立って、「そうだ。」とひらめいて僕にガムをくれた。しばらく黙って僕と内山さんはガムを噛みながら電車が来るのを待っていたが、その

時僕は内山さんに、

「僕、幕間のコント書きたいんです。」とポツンと言った。内山さんは紺のジャケットのポケットに両手を突っ込んで、右足の踵で地面をコツコツ叩きながら、

「どうぞ、どうぞ。」と言ってちょっと笑った。「書けたら見せてね。」と言ってくれた。